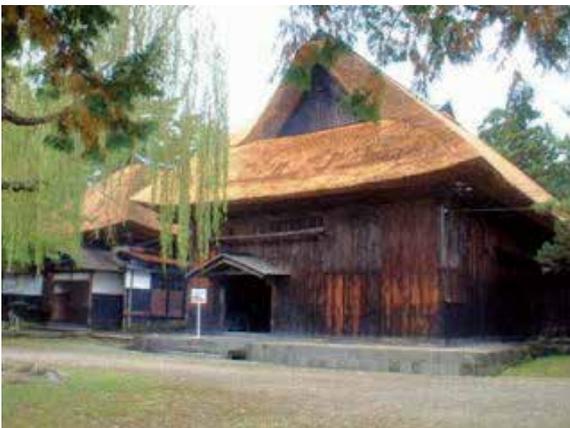


Museum News

秋田県立博物館ニュース

ミュージアム・クイズ

上の写真は、とあるワラ細工です。秋田県立博物館の分館（旧奈良家住宅）で現在活躍しています。はたして何でしょうか？



秋田県立博物館分館「旧奈良家住宅」

(答えと解説は裏表紙にあります。)

目次

表紙・目次	P.1
展示紹介	
企画展「男鹿・南秋の自然と文化」	P.2
資料紹介	
(生物部門)「ヤブツバキ」 (アクリル樹脂封入標本)	P.4
活動報告	
(歴史部門)「古文書整理ボランティア」	P.4
学芸ノート	
(生物部門) 真澄の記述の中に 隠れていた謎の生物	P.5
(考古部門) 石器石材の産地を探る	P.6
(教育普及班) 学芸員とその卵たち	P.7
平成27年度展示予定	P.8

平成26年11月29日(土)～平成27年4月5日(日)

企画展

男鹿・南秋の自然と文化

当館では開館以来、「郷土の自然と文化に関する認識を深める」という秋田県立博物館条例の趣旨に基づき、「伝説のさとー鹿角」、「鳥海山麓展ー山と人ー」、「平鹿ー水とくらしー」、「能代山本ー川と山のくらしー」、「湯沢雄勝の文物展」など、地域調査に基づく地域展を企画・開催してきました。

今回、男鹿・南秋地域をテーマに、平成24年度から地域調査を実施し、それらをもとに地域展を開催いたしました。この地域は、日本海に突き出した半島がその懐に大きな潟や干拓地を抱いてきたという特徴から、人や生き物などが寄り集まり、特色豊かな地域形成を遂げてきました。展示では、自然・人文諸部門を備えた総合博物館として、さまざまな切り口で地域の魅力を発信するとともに、特徴的な資料を活用して、ふるさと学習の一助となるような展示をめざしています。

企画展の開催にあたり、展示資料の出品をはじめ、調査や展示の際にご協力いただきましたたくさんの方々的心からお礼申し上げます。



展示構成

【各部門のテーマ展示】

- ◎男鹿・南秋の大地のおいたち〔地質〕
- ◎男鹿・南秋のいきもの〔生物〕
- ◎資源開発の幕開け～旧石器・縄文人を魅了した黒曜石・珪質頁岩～〔考古〕
- ◎霊場としての男鹿〔歴史〕
- ◎男鹿・南秋のワラ細工技術～履物類～〔工芸〕
- ◎潟のめぐみ～八郎潟の漁業～〔民俗〕
- ◎菅江真澄と男鹿・南秋の板碑〔菅江真澄資料センター〕
- ◎男鹿半島の先覚者～中川重春、古仲鳳洲、天野芳太郎を中心として～〔秋田の先覚記念室〕
- ◎男鹿・南秋のくすり〔民俗〕
- ◎男鹿の港 今昔〔歴史〕
- ◎高度経済成長期の記憶と未来への展望〔歴史〕

【トピック展示】

- ・対馬海流が運んだ軽石
- ・豊川タールピットと天然アスファルト
- ・縄文人の海洋資源開発
- ・江戸時代に発見された奇妙な土器
- ・あわれな「人魚」
- ・明智光秀の書状
- ・翻弄される瀧の頭
- ・対馬暖流と温暖化



ソーラーカー「ジョナサン」

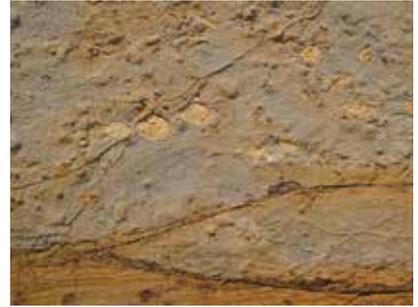
大潟村の「ワールド・ソーラーカー・ラリー」から生まれた「ジョナサン」は、2007年10月に開催された世界最大規模のソーラーカー・レース「ワールド・ソーラー・チャレンジ」に出場しました。太陽電池と水素の燃料電池のハイブリッド・ソーラーカーとして、大会関係者のみならず世界中の自動車エンジニアから注目されました。

総合博物館ならではのさまざまな切り口で男鹿・南秋地域を紹介



男鹿凶屏風

江戸前期の作とされる「男鹿凶屏風」には、現在ではみられない数多くの堂社が描かれ、本山・真山が広く信仰を集めていたことがうかがわれます。また屏風には、舟に乗り島めぐりに興ずる姿もみえ、優れた信仰の場は、優れた保養・観光の場でもあったことがわかります。



対馬海流が運んだ軽石

およそ11万年前の島根県の三瓶火山の噴火で放出された軽石が、男鹿半島の地層から発見されたことから、当時の日本海にも北へ向かう海流があったことがわかります。



打瀬船

昭和20年代まで八郎潟の風物詩として優雅な姿を見せていた打瀬船とその漁法は、茨城県の霞ヶ浦から伝えられたものです。今回展示したのは実物と同じように製作された4分の1サイズの模型です。その製作過程の映像や、打瀬漁法の模型も紹介しています。



大潟村の鳥

干拓によって生まれた平坦で広大な大地に様々な鳥が集まり、大潟村では秋田県で見られる鳥類の74%を観察することができます。

地域調査にもとづく展示の数々



ワラグツ

県内各地の資料館での調査をもとに、ワラグツを13種類に分類し、展示・解説しています。



黒曜石

岩手県奥州市のおよそ2万年前の遺跡から、男鹿半島産の黒曜石製石器が多数発見されました。当時の旧石器人は、奥羽山脈をまたいで150kmを超える広大な範囲を移動していたのでしょうか。



男鹿半島の昆虫

今回の地域調査で採集した男鹿半島のチョウやガについて、男鹿半島に特有な種類や男鹿半島が北限である種類などを紹介しています。男鹿が本土とつながったり島になったりした時代に、昆虫はどのように渡ってきたのでしょうか。
(展示・資料班：渡部 均)

生物部門

ヤブツバキ *Camellia japonica* L. (アクリル樹脂封入標本)



男鹿市船川港椿能登山に咲くヤブツバキ

大正11年(1922)、男鹿半島南磯にある能登山のヤブツバキ群落は青森県夏泊半島のヤブツバキ群落とともに「ツバキ自生北限地帯」として秋田県で初めて国の天然記念物に指定されました。指定の理由は天然記念物の指定基準の植物(十)「著しい植物分布の限界地」に当たるというもので、指定範囲は約9,500㎡余りです。生物の北限は、一般的に緯度によって決まるとされていますが、暖温帯域に生育する常緑広葉樹の一種のヤブツバキが男鹿半島にも生育しているのは、暖流である対馬海流の影響を受けたことによるものと考えられています。男鹿半島に自生するツバキ属の植物はヤブツバキだけ

とされ、自然展示室にはアクリル樹脂封入標本が展示されています。花卉の色はやや薄くなっているものの、実物にはほぼ近い状態を保っています。平成25年3月に男鹿市教育委員会が発行した「男鹿市文化財調査報告第41集」では、能登山周辺は集落に隣接しヤブツバキ群落とは直接関係のない植栽由来の植物や帰化植物も生育していることとあわせて、地域の方々の長年にわたる維持管理によってヤブツバキがよく育っていることが記されています。里の中にあって長く愛されてきたこの群落をこれからも大切に守ってほしいと思います。

待ち望んだ暖かい春も間近です。4月中旬には能登山のヤブツバキも開花することと思います。能登山のヤブツバキ群落を訪れる際には、自然展示室に展示しているヤブツバキのアクリル樹脂封入標本をぜひ御覧ください。(生物部門：永井 元)



自然展示室に展示されているヤブツバキ (アクリル樹脂封入標本)

活動報告

歴史部門

県博友の会古文書整理ボランティア活動開始

三度の食事より“古文書が好きな方”集まれ!

平成26年7月 本館に「秋田県立博物館友の会古文書整理ボランティア」が発足しました。活動日は毎月2回の水曜日、時間は午前10時から午後4時。活動メンバーは、いずれも「三度の食事より古文書が好き」という強力メンバーです。

整理作業を行っている古文書は 平鹿郡八沢木村(現横手市大森町八沢木)の波宇志別神社の別当守屋家の古文書です。通説では、守屋家は嘉永6年(1853)自宅の火災で多数の参詣人を焼死させた罪により、岩館に追放されたとあります。しかし、古文書を整理する中で、幕末期、守屋家当主の造酒進が秋田藩の家老小野岡右衛門と親密に交流する書状が出てきたり、明治2年(1869)守屋造酒進が武士に召し立てられる資料が出てきました。

守屋家資料の整理は、新たな歴史像発見の興奮と共に進んでいます。博物館で古文書の整理をやりたいという方、ぜひ御一報ください。

(歴史部門：畑中 康博)



整理前の状態《Before》



整理後の状態《After》



守屋家資料整理風景



野外研修
波宇志別神社神楽殿にて

真澄の記述の中に隠れていた謎の生物

江戸時代の紀行家、菅江真澄は本草学を学んだ人で、著述の中に植物に関するものは多い。しかし、動物にはあまり詳しくなかったようで、江戸時代の秋田の動物についての記載はあまりない。そういう先入観があって、恥ずかしながら真澄の記録をまじめに読んだことはなかった。

ところが数年前、当館の真澄担当が展示で紹介した『みかべのよろい』の中の一文が、目に突き刺さった。要約するとこうである。「案内人が山奥で迷ったが、山の峰に至って一安心した。休憩中に、変な音がした。案内人のキセルの音かと思っただ、その音は、ブナの朽ち木から顔を出している大蛇のいびきであった。」この文を読んだとき、ある光景がまざまざと浮かび、心臓の鼓動が急に速くなったのを感じた。

もちろん、蛇がいびきをかくはずもなく、山奥で「キセルが鳴る音」はほかの生き物の音であることは間違いない。問題はそれが何者の発した音なのかである。

原文ではこの音は「あやしの笛のように、キセルの鳴ることよ」とされ、さらに「つゆやまざるはいかに（いっこうにやまないのはどうしたことか）」とあるようにしつこく繰り返されている。おそらく金属音に近く、しかも長く伸びる音である。そういう音を出す生き物はいくつかの鳥かシカやキツネなど数種の獣しかいない。

さらに原文を読み解く。「大なるブナの朽木のうつばよりいつさかばかりあがりて、大なるをろちのいる黒きが、三さかばかり出て（大きなブナの朽ち木の地上五尺ばかりの洞穴から黒い大きな蛇が三尺ばかり出て）」とある。つまり、大きなブナの朽木の地上2m弱あたりの樹洞から大きな蛇が90cmほど出ていた、というわけである。黒っぽくて木登りをする大きな蛇といえば、秋田ではアオダイショウ以外にない。「おろち」とはいかないが、秋田で最も大きくなる蛇である。

アオダイショウは木登りが上手く、樹洞に作った巣の中の雛を食べてしまうので、多くの鳥の天敵となっている。巣穴やねぐらのそばで姿を見たときの鳥の警戒や威嚇は激しい。一方、シカやキツネは蛇を見て警戒して声を出すことはまず

ない。つまり、蛇のそばで連続した金属音を出しているのは、鳥であるということになる。

この記述があった場所は、前後の文から現在の北秋田市七日市松沢から北秋田市根森田にかけての山中と推察される。新しくできたダム湖（森吉四季美湖）の北側だと言えれば分かりやすいだろう。杉が植林され、ダムができたとはいえ、現在でもここにはブナが多く残っている。真澄の頃はおそらく立派な天然ブナ林が広がっていたことだろう。

ブナの巨木の枯木に穿たれた大蛇が入るほどの穴を利用する鳥、金属的な鳴き声を発する鳥、天然ブナ林の中に生息する鳥、これらに共通する生き物はただ一つ。

それはクマゲラである。クマゲラは日本では主に北海道に生息する日本最大のキツツキで天然記念物である。本州での繁殖が確認されたのが昭和53(1978)年で、それまでは北海道でしか繁殖しないものとされていた。この本州における繁殖の発見が、白神山地を世界遺産にまで押し上げたと言っても過言ではない鳥で、いわば世界遺産のシンボルとも言える。

クマゲラは巣作りに枯木を使うことはない。営巢用の穴は生木の、しかも地上から10m程度の高い場所にある。一方、ねぐらには枯木が使われることも多く、多くの場合、外敵の侵入に備えて1本のねぐら木に複数の穴が開けられ、それが内部で連結されている。また、クマゲラの警戒時の音声は「クイーン」「キヤー」などと表現されるが、どちらにせよ甲高く金属的な音で、興奮が続く限り連続して発せられる。

真澄の記録は、「そのねぐら木に何らかの理由があってアオダイショウが入り込み、それを見つけたクマゲラが執拗に警戒音を繰り返した」時のものであろう。クマゲラは真澄と案内人をも見つけているはずなので、その興奮度はどれ程のものであっただろう。私が科学捜査官なら、この状況はクマゲラ警戒時の状況証拠である可能性が極めて大きいと推定する。

本州におけるクマゲラの最古の記録は、伊達家の鳥類図譜に記録された1685年の会津などのことで、秋田では、仁部富之助によって1920年に記録された森吉山での生息記録が初めてである。『みかべの

よろい』が書かれたのは1805年のことであるから、推理が正しければ、秋田における記録は、さらに100年以上遡ることになる。

さて、森吉山でのクマゲラの繁殖は断続的で、初めて観察された1978年から2014年までの37年間で18例が報告されるのみである。断続的である要因の一つに生息地の消失による絶対的な個体数の不足が挙げられている。また、近年では、人的ストレスによる巣の放棄も2年連続で確認されている。

人知れず文字の中に埋もれていた時代と、瞬く間に広がる情報によって人が押し寄せる時代と、どちらが幸せなのか。真澄の足元にも及ばないが、調査と記録をする人間として自戒の意を込めて、ここに残しておきたい。

(生物部門：船木 信一)



『風の落葉二』より (秋田県公文書館提供)



ねぐら木のクマゲラ雄 (川村俊春氏撮影)

石器石材の産地を探る

1. 三大石器石材

旧石器時代や縄文時代の石器^{せっき}には、それに適した石材というものがあります。日本では石器三大石材として、黒曜石^{くわうせき}・珪質頁岩^{けいしつげつがん}・サヌカイトが知られています。黒曜石は、北海道白滝や長野県和田峠、佐賀県腰岳^{こしだけ}などが、サヌカイトは大阪府と奈良県にまたがる二上山や香川県国分台^{くにぶたい}等が産地として有名です。そして、珪質頁岩は北海道南部～青森県津軽地方～秋田県～山形県～新潟県までの日本海沿岸部に広く分布します。

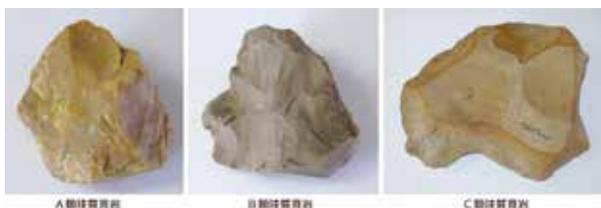
黒曜石・サヌカイトは火山のマグマが噴出、急冷により形成された火成岩です。そのため、噴火口を中心に「点的」に分布します。一方の珪質頁岩は今から約1,200万年前の日本海形成のとき深海底に堆積した泥や生物の遺骸等が積もって出来たもので、上述の範囲に広く「面的」に分布します。

2. 珪質頁岩はどこでも拾える？

秋田県では珪質頁岩を産出する新第三紀中新世の地層を「女川層^{おんながわ}」と呼びます。かつての日本海底はその後、隆起し、現在は陸上に現れています。広い範囲に面的に分布するという事は、「どこでも拾うことのできる石材」と思われがちです。実際、多くの石器研究者はそうのように先験的に理解していました。ところが、当時の石器を観ると、珪質頁岩なら何でも良いというわけではなさそうなことが分かってきました。そこで私は旧石器～縄文時代の石器をもとに珪質頁岩を肉眼観察により次の3種類に分類しました。

- A類：玉髓質^{ぎよくずい}で硬質な半透明の頁岩（縄文時代の特定の時期に利用）。
- B類：油脂光沢の発達したキメの細かい頁岩（旧石器～縄文時代の石器製作・使用に最適）。
- C類：珪化作用が進んでおらずキメの粗い頁岩（主に縄文時代に利用）。

そして、これら3種類の珪質頁岩の産地を調査することにしました。



珪質頁岩の3分類

3. フィールド調査へGO！

珪質頁岩の産地調査は、当館で例年実施している石器作り教室の石材入手という目的もありました。フィールド調査へ出る前に、地質調査所や秋田県で発行している表層地質図を開き、女川層とそれを開析している沢を探します。また、調査対象地域の遺跡から出土した石器を観察し石質の特徴を把握します。



調査の道具

石材調査は、今年度から当館で立ち上げた考古学ボランティアの方々や県内外の研究者有志とともに実施しました。地形を確認しながら、段丘礫層^{だんきゅうれき}が観察できる崖や河川敷、沢を歩きます。岩石ハンマーを片手に石を割っていき、今後の調査や分析に役立つようなサンプルを採集します。

その結果、A・B類頁岩にはなかなか出会えないことが分かってきました。ときおり良質な石材が見つかりますが、かなり限定的に産出するようです。従来から言われているように「どこでも拾える」ものではありませんでした。

旧石器時代や縄文時代の人々が珪質頁岩の原石をどこで採集したか、今後も調査を継続、探索していきます。（考古部門：吉川耕太郎）



秋田県立博物館友の会考古学ボランティアとの石材調査

学芸員とその卵たち

博物館にいる人のことを「学芸員」と呼びますが、「学芸員」とは博物館において調査研究や教育などの活動を行う専門的職員で、また「博物館法」に定められた資格のことをさします。

学芸員の仕事は一言では容易にあらわせませんが、美術館や博物館で作品や資料の収集・保存・研究・教育を行ったり、企画展示を立案し、その実現のために資料借用に飛び回ったり、様々な交渉を行います。教育に関わる仕事としては、来館した学校の指導や補助、校外学習の講師を務めたり、博物館教室などの講座を開講し、その講師を行う仕事もあります。また、市民から専門分野についての問い合わせに応じ、アドバイスをしたりします。

公立の博物館の学芸員の場合は、その自治体の職員でもあるため、文化財保護行政や自然保護関係の調査に関わったり、観光や生涯学習などの自治体の政策に関わる役割を担うことも期待されています。

学芸員の資格は、大学・短大で規定の単位を取得することや、文部科学省で行う資格認定試験に合格すれば得ることができます。大学・短大で資格を取得するには、実際に博物館で実習を行う必要があります。教員になるために教育実習があるように、学芸員になるためのそれは、博物館実習と呼ばれています。当館でも毎年、学芸員の資格を目指す学生を受け入れて博物館実習を実施しており、その際、どのような内容の活動をしているのか、紹介します。

平成26年度の博物館実習は、8月11日から16日までの6日間、茨城大3名、新潟大、筑波大、札幌学院大、東北芸術工科大、宮城学院女子大、帝京大各1名の計9名の学生が参加しました。実習は、博物館に関する事を講義形式で学ぶものと、実際に資料を取り扱ったり、博物館の事業や業務を体験する体験実習形式の二つに分かれます。

講義では、秋田県立博物館の概要や組織・実務、当館の資料の収集方針や保存環境、企画展示を行

う場合の手順とそれに伴う広報活動、東日本大震災を例にした災害時の対応事例、学校の博物館利用の支援とその事例などを説明・紹介しました。

体験実習では、普段見ることのできない収蔵庫や機械設備、くん蒸施設の見学、体験展示室での体験アイテムを実際に使用しての体験学習、各部門担当者の指導の下、資料の取り扱い方法の説明と実習、来館者に対する観覧者調査、実習生の立場から見た設備・施設の問題点の洗い出し、学校広報用のパンフレットの原案作成の実習などを行いました。



歴史資料の取り扱い実習

博物館実習は、学生にとっても実際の博物館の様々な資料や施設設備、業務内容に触れるよい機会であるとともに、受け入れる博物館側にも、博物館としての基礎や基本を再確認したり、第三者の視点から日常業務を見直して改善の意見を出してもらうなど、博物館活動を見直すよい機会でもあると言えます。今後も、学生にとっても博物館にとっても、効果的なものとなるようにしたいと思います。（教育普及班：鈴木 秀一）

平成27年度 展示予定

特別展

徳川将軍家と東北

9月12日(土)～10月25日(日)

企画展

石斧のある世界

4月25日(土)～ 6月21日(日)

企画展

博物館の挑戦状

7月25日(土)～ 8月23日(日)

企画展

新着・収蔵資料展

11月14日(土)～ ^{H28}4月 3日(日)

菅江真澄資料センター

企画コーナー展

- 真澄の旅 ～信濃と越後と～
- 内田文庫の貴重資料
- 奥羽永慶軍記と真澄

7月18日(土)～ 8月30日(日)

10月24日(土)～12月20日(日)

^{H28}3月19日(土)～ 5月15日(日)

秋田の先覚記念室

企画コーナー展

理紀之助と貞直 ～農聖の底に流れるもの～

9月26日(土)～11月29日(日)

ふるさとまつり広場

●七夕絵どうろう

6月 9日(火)～ 7月24日(金)

●秋田の土人形

9月 1日(火)～11月 1日(日)

●正月儀礼 ～豊作を祝う・豊作を祈る～

11月 3日(火)～ ^{H28}1月31日(日)

●ひな人形・押し絵

^{H28}2月 2日(火)～ 4月 5日(火)

ロビー展示

- ^{うわ はば}上掬遺跡の最新成果速報展
- 楽しいしぼり染め作品展

5月 2日(土)～ 6月 7日(日)

7月25日(土)～ 8月23日(日)

表紙クイズの答え

答えは「^{えんざ}円座」という座布団です。これまで40年以上使用していた円座が劣化したため、当館ボランティア「笑の会」により、技術を再現・伝承する目的で作製されたものです。

